

# シンポジウム「源氏物語の古筆切」

パネラー

田中 登・別府節子

池田和臣・今西祐一郎

司会

横井 孝

はじめに

学でも、九月末から十一月初めの足かけ三ヶ月、各種のイベントを行いました。

▼司会・横井 本日は実践女子大学・短期大学の公開講座「源氏物語へのアプローチ」におはこび頂きありがとうございます。

去年は「源氏物語千年紀」ということで、各地でいろ

いろな関連のイベントが催されました。わが実践女子大

今年「源氏物語千一年紀」というわけではございませんが、昨年ひきつづき、さまざまな形で、『源氏物語』にアプローチしていきたいと考えております。すでに十月三〇日（土）には「源氏物語と万葉集」という新しい切り口で講演会を行いました。

今回は「源氏物語の古筆切」をテーマとしたシンポジ

ウムです。来週には、この同じ会場で、「源氏物語の雅楽」として、実際に『源氏物語』の六条院の「女楽」のミニチュア版、また男踏歌を聴いていただき、見ていただきたいと考えております。またこれの付録のようなものですが、これも昨年にひきつづき、『源氏物語』に登場する「黒方」というお香を焚いてみたいと思っております。このようにいろいろな切り口での『源氏物語』を楽しんでいただければと思います。

また、毎年、春か秋に『源氏物語』に関連する展示会を学内で開いておりますが、今年は五月から六月にかけて「源氏物語 薄雲の世界」というテーマで行いました。私どもが所蔵している『源氏物語』の写本ですが、本の形ではなく、いわゆる「古筆切」というものを展示いたしました。

より専門的な地味な展覧会であったにもかかわらず、多勢の方に見ていただくことができました。ただ、多くの方に感心していただく一方で、「古筆切とは一体何なのか、もっとよく説明してもらいたい」「古筆切につい

て、系統だったことを教えてもらいたい」といったご要望が寄せられました。

当方としても、ご要望にお応えするだけでなく、古筆切は本の形をしたものより、さらに豊穡な世界を持っている場合があるということ、積極的に皆様を知っていただきたいと思ひまして、今回の企画を考え次第です。

五月、六月の展示会では、本日の壇上におられる田中登先生、池田和臣先生が所蔵されている貴重な古筆切をお借りし、本学所蔵の古筆切と並べて展示させていただきますました。そういうご縁もあることですので、こういう場でレクチャーしていただこうと考えました。さらに、このお二方に加えて、この分野のエキスパートの先生お二人においでいただき、このシンポジウムを開くことと致しました。

ここで講師の先生方を、登壇順にご紹介いたします。まず田中登先生、関西大学の教授でいらっしやいま

す。一九九七年に上梓された『古筆切の国文学的研究』（風間書房）という著書で有名です。その後『平成新修古筆資料集』（思文閣出版）を、現在のところ四冊刊行されています（まだまだ続刊されるとお聞きしております）。古筆切はこれまで骨董的、美術的な注目をされることが多かったのですが、田中先生はこれを国文学に引きつけ、頭打ちの感のあった新資料発掘という点について、まだまだ豊富にあることを実際に示して、平安・中世の国文学研究の中に体系づけたパイオニアと言える方です。

次に登壇いただくのは別府節子先生、出光美術館の学芸員でいらつしやいます。つい先日、九月から十月にかけて、「芭蕉 奥の細道からの贈りもの展」という、松尾芭蕉の真跡を集めた大きな展覧会が行われましたが、その企画立案から開催までを一人でこなされました、書跡のエキスパートでいらつしやいます。出光美術館といえは国宝の古筆手鑑「見努世友」<sup>みぬよのとも</sup>が有名ですが、その中に和歌資料や物語資料など貴重な資料が数多く埋もれ

ておりまして、それを発掘した方でもあります。美術や書、国文学について、それぞれにお詳しい方です。出光美術館は、毎年『研究紀要』という大変りっぱな雑誌を刊行されていますが、ほとんど毎号、非常に内容の濃い、長い論文を掲載していらつしやいます。

三番目は中央大学教授の池田和臣先生です。つい最近、ご自身の編・解説による『飯島本源氏物語』（笠間書院、全一〇巻）を刊行されました。「飯島本」とは書の世界での大御所である飯島春敬氏（一九〇六一—一九九六）が所蔵されていた『源氏物語』の一本です。

現在、『源氏物語』に関しては「別本」と呼ばれる種類が大変注目されていますが、この飯島本もその一つです。これが池田先生のご尽力で刊行されたことにより、『源氏物語』の本文テキストの研究が一段と進むものと思われれます。

ほかにも『源氏物語 表現構造と水脈』（武蔵野書院）という本を二〇〇一年に刊行されています。この本は理論を中心とした、かなり分厚く難しい本です。最近では

新書版で内容もわかりやすく楽しい『逢瀬で読む源氏物語』（アスキー新書）を出版されています。また、まだ出版はされていませんが、最近では『源氏物語』の古書切についても、大きな発見を次々とされ、それこそ新聞にも連載のように、お名前が出てきますので、皆さんの中にもご存じの方もいらっしゃると思います。皆さんにお配りした資料集にもその新聞記事の一部を掲載しております。

最後は今西祐一郎先生です。人間文化研究機構国文学研究資料館館長でいらつしやいます。一九九八年に『源

氏物語覚書』、二〇〇七年に『蜻蛉日記覚書』を岩波書店から出版され、また同じ岩波書店の新日本古典文学大系『源氏物語』（全五巻）の校注をなさっています。『源氏物語』に関してはエキスパート中のエキスパートです。ただ、今回ご用意いただいたお話は「古筆嫌い」というタイトルがついております。前にお話しいただく先方の内容をひっくり返すようなタイトルでもありますので、どのような展開になるかハラハラドキドキですが、一方、楽しみでもございます。それでは、田中先生からお願いいたします。